

現代日本語学

Japanese Linguistics

現代日本語学講座は、日本語の何らかの現象に正面から取り組みたい人にふさわしい講座です。日本語の言語事実を踏まえ、それをいかに説明し、理論化するかが目指すところです。三人の教員が担当し、専門は、音声学、音韻論、文法論、意味論、語用論、認知言語学、対照言語学におよびます。基礎研究が中心ですが、日本語教育への研究成果の応用を射程に入れた研究を行うことも可能です。また、日本語と韓国・朝鮮語などとの対照研究を志す人も歓迎します。本講座では、すでに約20名の人が博士号を取得し、大学などの研究・教育機関で、研究者として活躍しています。

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/gendai/>

教員と専門領域・研究テーマ

梶山洋介 教授

(もみやま ようすけ)

専門は、意味論、認知言語学。主な著書に、『認知意味論のしくみ』、『日本語は人間をどう見ているか』、『日本語表現で学ぶ 入門からの認知言語学』、『認知言語学入門』（いずれも研究社、単著）がある。共編として、『講談社類語辞典』（講談社）がある。

鹿島 央 教授

(かしまのむ)

専門は、音声学、音声教育（日本語学習者による日本語リズムの生成と知覚、韻律レベルの音声教育）。主な著書に、『基礎から学ぶ音声学』（スリーエーネットワーク）がある。

李 澤熊 准教授

(い てぐん)

専門は、日本語学（意味論）、日韓対照研究。著書に『主体の意図にかかわる副詞（的機能を持つ表現）の意味研究』（博士学位論文 2003年）、『ことばのダイナミズム』（共著、くろしお出版）がある。

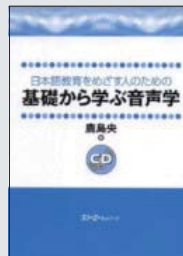
◎現代日本語学研究会

現代日本語学研究会は、1994年に始まり、2011年現在、125回を迎えました。毎回1名か2名の方が発表し、質疑応答も時間をかけておこないます。研究分野は「意味論」「文法論」「語用論」などを原則としますが、理論的枠組みは問いません。参加者は主に東海地方の大学教員、大学院生ですが、来ていただける方はどなたでも大歓迎です。

◎音声学研究会

毎週金曜日の5時から1時間半程度行っている音声学研究会では、修士論文あるいは博士論文の構想、途中経過、投稿論文の中身などを、順番を決め発表しています。ここでは、活発な議論を通して問題点の整理をしたり、問題解決の糸口をみつけたりすることで、お互いの研鑽に努めています。音声に興味のある方は、どなたでも参加できます。

◎教員の著書紹介





「現代日本語学概論」授業風景。

現代日本語学講座博士学位論文リスト

- (1) 木下りか 1999.03『文末における「真偽判断のモダリティ」形式の意味』
- (2) 田中聡子 1999.09『視覚動詞の意味論』
- (3) 鈴木智美 2000.03『人と言葉との関わりの探求に向けて-“言葉で言い表せない”体験をめぐる現代日本語研究と力動記号学の観点からの考察-』
- (4) 鷺見幸美 2002.03『現代日本語移動動詞の意味論』
- (5) 鷺留美 2003.03『ジェンダー化された「日本語」-形成過程、及びその象徴的意味と政治的機能』
- (6) 李澤熊 2003.03『「主体の意図にかかわる副詞（的機能を持つ表現）」の意味研究』
- (7) ケキゼ・タチアナ 2003.03『現代日本語の非断定表現～「そうだ」、「げ」、「っぽい」を中心に～』
- (8) 武藤彩加 2003.12『日本語の『共感的比喩（表現）に関する記述的研究』
- (9) 山本裕子 2006.01『方向性を持つ補助動詞の意味と機能』
- (10) 山森良枝 2006.10『日本語の限量表現の研究』
- (11) 高橋圭介 2007.03『現代日本語における思考動詞の意味分析』
- (12) 松岡みゆき 2007.10『現代日本語の終助詞「よ」「ね」「よね」-意味論と語用論の接点を求めて-』
- (13) 山本幸一 2008.03『メトニミーの認知言語学的研究 -非自立型メトニミーを中心にして-』
- (14) 有園智美 2009.03『身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究』
- (15) 馬場典子 2009.07『怒りを表す動詞（句）の意味分析』
- (16) 中林律子 2009.07『「驚き」「嫌」という感情表出に関する音声学的研究 -日本語母語話者とロシア人日本語学習者を対象とした実験に基づいて-』
- (17) 三木理 2010.03『「～じゃない」の発話意図に関する音声学的研究 -韓国語を母語とする日本語学習者の音響的、聴覚的分析に基づいて-』
- (18) 野呂健一 2010.03『現代日本語の反復構文 -構文文法と類像性の観点から-』
- (19) 野田大志 2011.02『現代日本語における複合語の意味形成 -構文理論によるアプローチ』